

胃ろうと向き合う

■1■

胃にチューブを通して栄養を送る「胃ろう」。食べられなくなったときに人工的に水分や栄養を補給する方法の一つだ。体への負担が少なく、急速に普及した一方、意識がない人の延命に用いることを疑問視する意見が広がっている。胃ろうとう向き合えばいいのだろうか。患者や家族、医療・介護の現場を訪ねた。

(余村泰樹 写真も)

生きてほしくて

母はもう、しゃべることができない。でも呼び掛けると「うー」と声を出す。時折笑顔にもなる。知らない人には反応しないのに、娘の私に何か言いたいのだ。だから仕事が終わりの金曜日、欠かさず会いに行く。「母ちゃん、よしこだよ。広島市安佐北区の特別養護老人ホーム、ベッドに横たわる中原マコさん(96)に娘の大立美子さん(65)が語り掛ける。柔らかな光が差し込む部屋で、優しく手

つなぐ命 母いとおし

「5年半…」 心にしこり

「一日でも長く」 認知症は進んでいくが、髪にパーマをかけた「ありがたう」と喜んでくれた。若い頃は優しく、頑張り屋で父が事業に失敗し、死なせるのはかわいそ

胃ろうとは

腹部に1センチほどの穴を開け、胃に通したチューブから栄養剤を送る胃ろう。内視鏡を用いた15分ほどの手術で設置できる。鼻からチューブを通す経鼻経管栄養法と比べて患者の苦痛や不快感も少なく、十数年前から急速に広がった。全日本病院協



会の2010年の調査では胃ろうを付けている人は全国に約26万人と推計している。胃ろうのほかの人工栄養は、経鼻経管栄養法、心臓近くの静脈から高カロリー栄養液を入れる中心静脈栄養法、手足の静脈に管を入れる経外周静脈栄養法などがある。



「母ちゃん、来たよ」。大立さんは、特別養護老人ホームでベッドに横たわる母に語り掛けた (広島市安佐北区)

ら」。胃ろうに頼って命をつなぐ母に、そつと寄り添う。 一方、胃ろうがつむぎ出す時間に、苦しんだ家族もいる。 「やっとなんかね」。4月、88歳で逝った母の井本愛子さんに、広島市西区の介護職戸川登美子さん(62)は静かに声を掛けた。胃ろうを付けて5年半後の旅立ちだった。

「面会 反応なく」 でも戸川さんばかりだった。面会に行き、母に語り掛けたも反応がない。手を硬く折り曲げたままベッドに横たわる。視線も合わない。最初は胃ろうからの栄養も受け付けず、首から静脈に管を通して高カロリーの液を入れた。指先や体がパン

「差し控え」「中止」広がる 日本老年医学会 立場表明を改訂 年1月、「高齢者の終末期の人工栄養の導入を適切に決定するた減量も選択肢に挙げた。家族から中止の申し出があった場合、適切に運用をすれば人工栄養の差し控えや中止も法的に問題ないと認められれば受け入れるとした。

「朝風呂」 旅先の朝風呂で遠いあの日、ふいに飛び出した。19歳だった私は、日曜日の母と祖母から「風呂が沸いたら、入れよ」と言われた。 「えっ、朝から」と私はたまに「今日は晴れの日は、ゆっくりせえ」と祖母は続けた。

そして仏壇の前で両親と祖母に「長い間、お世話になりました」と手を握った。涙が込み上げた。 それから仲人さんに手を引かれ、「ごぼこの坂道を150歩ほど歩いて、今の家に来た。子どもも大人も総出て行列についてきた。

いびき

呉市 主婦 水野美那子 79歳

朝風呂 旅先の朝風呂で遠いあの日、ふいに飛び出した。19歳だった私は、日曜日の母と祖母から「風呂が沸いたら、入れよ」と言われた。 「えっ、朝から」と私はたまに「今日は晴れの日は、ゆっくりせえ」と祖母は続けた。

朝風呂 旅先の朝風呂で遠いあの日、ふいに飛び出した。19歳だった私は、日曜日の母と祖母から「風呂が沸いたら、入れよ」と言われた。 「えっ、朝から」と私はたまに「今日は晴れの日は、ゆっくりせえ」と祖母は続けた。